［研究ノート］

英語語彙における二重語の意味の差異化（第4回）
―― ラテン語起源(1)

安　達　一　美

英語の単語の歴史を調べていると、ことばは生き物であると実感します。ことばがどのように生まれたのか、その究極的な起源は闇のうちですが、語や句が形成されていく過程を調べることはできます。外国語からの借入や英語における語形成などによって、英語の語彙に加わった語や句は、時代の変化、社会の変化にともなって語の意味が発達していき、非常に良く使われる活力のある語となったり、時にはある特定の意味が廃義になったり、また、語そのものが使われなくなって廃語になったりします。その変化に、語の栄枯盛衰を見る思いがします。それが、語彙の歴史を調べる醍醐味であるといえるでしょう。

語源が同じであるにもかかわらず、別語として一言語の語彙に存在する一対になっている語を二重語といいます。二重語は英語に限らず、借入語に対して寛大である言語は必ず持っているものです。多くの言語から借入を繰り返してきて豊かな語彙をもつ英語は、二重語の宝庫であるともいえます。ことに、英語語彙においてラテン語を起源とする二重語は最も多く、英語の二重語のうち約3分の2を占めています。シリーズ第4回目となる今回の研究ノートからラテン語起源の二重語を取り上げます。語源となる一つの語から諸言語を経由して英語において二重語となった語に、どのような意味の差異化が生じているか、語の歴史を探求してみましょう。

1. abbreviate（v.〔略語を用いて〕縮約する）vs. abridge（v.〔書物などを〕簡約化する）

この二重語の語源は、ラテン語の形容詞*brevis*（短い）の動詞形*breviāre*（短くする）に接頭辞ab-またはad-が付加して形成された後期ラテン語*abbreviāre*（短くする）である。*brevis*は古フランス語*bref*を経て14世紀に英語に入ったbrief（短い）の語源でもある。この二重語はいずれも中英語期に

借入された。abridge は12世紀に古フランス語に入った*abreger*（短くする）を経由して13世紀に英語に入り、abbreviateは後期ラテン語動詞*abbreviāre*の過去分詞*abbreviātus*から直接借入された。なお、フランス語では、*abréger*（短くする）の派生名詞形は、*abrégement*（短縮、抄録）が男性名詞で、*abréviation*（短縮、省略、略語）が女性名詞である。

abridgeは、人間に関して「出し惜しみする、奪う、妨げる」の意味で借入されるが、程なく時間に関して「短くする、継続時間を短くする」の意味になる。「奪う」の意味も古語としてではあるが未だ生きており、to abridge someone of his rightsは「人から権利を奪う」という意味である。やがて13世紀終わりには「言葉を短くする」の意味が付け加えられ、18世紀後半には「一般的に、短縮して作り出す、凝縮する」の意味が発達した。辞書の表題でよく目にするunabridgedは「短縮されていない完全版の辞書である」ことを意味している。

abbreviateは「詳細を割愛して話を短くする、要約する」の意味で15世紀中ごろに借入されるが、この意味は17世紀末ごろには廃義となる。16世紀前半に「何らかの方法で短くする」の意味に一般化される。16世紀後半に「話し言葉、書き言葉、あらゆる種類の象徴に関して、ある部分で全体を表せるように短縮する」が発達して現在の意味に至っている。例えば“Dozen”is abbreviated as dz.（ダースはdsと略される）のように使用している。

2. compute「計算する、見積もる」vs. count「数える、計算する」

compute とcountはラテン語*computāre*（一緒にまとめて計算する、見積もる）を語源とする二重語である。このラテン語の基体である*putare*は、原義が「ふるいにかける、刈り込む」で、「ぶどうの木などを剪定する」という農業用語として用いられおり、初期のローマ人が農耕民族であったことを示す例証と考えることができる語である。さらに意味が「計算する、評価する、考える」へと発達した。*putare*に由来する英語の語彙には、dispute（議論する）、deputy（代理人）、repute（評判）、putative（推測上の）、reputation（評判）などがある。

ラテン語*computāre*が古フランス語に入り*conter*になる。古フランス語においては、俗ラテン語のuがmやnの影響で鼻母音化される傾向があり、母音

の鼻音化の後に12から13世紀には発音されなくなった。ptの閉鎖音[p]が脱落するのはラテン語から古フランス語に発展する段階で見られる現象である。例えば、*septem*（7）が古フランス語ではpが脱落して*set*になり、現代フランス語ではpが復活して綴りに現れているが発音はされない。

古フランス語の*conter*は‘to count out, evaluate, make out（bill, etc）（数える、見積もる、請求する）’の意味のほか、‘to add up and render an account（合計して請求する）’の意味から発達した‘to tell, relate, recount（語る、詳しく話す）’の意味もあった。古フランス語になったのは11世紀末であるが、前者の意味は16世紀には廃れ、13世紀にラテン語からの*compter*がこの意味を担い、*conter*と意味の差異化がなされた。したがって、フランス語においても二重語を形成している。現代フランス語でも*conter*は「語る、話す」後者の意味で用いられ、「数える、見積もる」の意味では*compter*が用いられている。ただし*compter*のpは発音されないので、これらの二重語は両者とも[kɔ̃te]と発音される。

英語**count**は古フランス語*conter*から中英語期に*counte*の語形で取り入れられた。OEDの初出は、c1325で、‘to number（数える）’と‘to estimate（見積もる）’の意味で用いられている。いずれも現代でも使われている語義である。「数を確かめるために一つ一つ数え上げる」という意味で、to count out the House（of Commons）という表現が生まれた。これは、「下院の出席者数を数えて定足数の40に達していないため議会を終わらせる」ことを意味する。16世紀前半には‘to include in the reckoning（計算に入れる）’の意味が加わり、「見積に入れる」「（人を）出席者ないしは支援者と考える、含む」の意味になった。またフランス語*conter*の‘to tell, relate（順序だてて話す）’という意味が英語においても15世紀初めから18世紀後半ごろまで用いられたが、廃義となっている。また、自動詞として14世紀末に‘to make reckoning（ざっと数える）’を意味したが、19世紀後半ごろを最後に廃義となっている。しかし、この意味を持つ表現のto count without one's host （帳場に問い合わせないで勘定する、重要な点を見落とす、一人合点で決める）がやや古い表現として残っている。また、「頼りにする、期待する」の意味のto count onは17世紀中ごろから使われている表現で、Count on it.（任せておいてよ）やI count on you to help.（ご助力を期待しております）

のように使える。

派生名詞のcounter（カウンター）は、中世ラテン語*computātōim*‘place of accounts（勘定する場所）’がアングロ・フレンチ*counteour*を経て、14世紀中ごろ「計算や記帳のための事務机」の意味で英語に入った。しかし、この意味は16世紀後半には廃義となる。借入初期に発達した「真鍮や卑金属製の模造貨幣」の意味で使われる。17世紀後半に「銀行や商店などの勘定台、カウンター」の意味が発達し現在に至っている。

computeは、17世紀前半フランス語*compter*より‘to estimate or determine by arithmetical or mathematical reckoning; to calculate（算術的ないしは数学的計算によって見積もる、計算する）’の意味で取り入れる。ほどなく意味の拡大によって、またはラテン語の語幹が持っている意味の広がりによって、「見積もる、考慮する、考慮に入れる」の意味が付け加わる。自動詞としては17世紀中ごろから「計算する」の意味で用いられる。17世紀終わりごろに、to count on（あてにする）と同じ意味でto compute uponが使われるが、100年ほどして使われなくなる。

computerは17世紀中ごろに派生語として形成され、もともとは‘person who computes（計算する者）’を意味していた。‘calculating-machine（計算機）’の意味でのOED初出は1897年である。1940年代に‘electronic brain（電子頭脳）’の語義が加わり現在のコンピュータの意味で用いられるようになった。

人間の生活と計算機とのかかわりの歴史は古く、紀元前4500年頃にはすでに様々な計算用具が考え出されていた。1649年にBlaise Pascalが歯車式加減算機を試作して以来、機械的計算機の開発は目覚しいものがある。初めての商業用コンピュータUNIVAC I（Universal Automatic Computer I）がJ. Presper EckertとJohn Mauchlyによって考案されRemington Rand社によって販売されたのが1951年3月のことである。computerの発達に伴って複合語も増産されている。computer-aided（1962）、computer game（1965）、computer dating（1966）、computer-literacy（1970）、 computer crime（1972）、computer-friendly（1982）、computer virus（1984） など多数ある。

3. construe（解釈する）vs. construct（組み立てる、建設する）

この二重語の語源はラテン語の*construāre*（積み重ねる、建てる）である。このラテン語の語幹は*stru-*であり、「建てる、積み上げる、組み立てる」を意味していた。

construeはラテン語より14世紀中ごろに*construen*として英語に借入される。現在では第2音節に強勢があるが、初期においては第1音節にあったため弱音節であった語尾が消滅して-stre，-sterになった。文法用語で「文の文法的構造を分析する」「（本来の意味から離れた特定の意味で）解釈する」を意味していた。15・16世紀には「文法的に語句を結合させる」「解釈によって意味を引き出す」や「行為・事物・人間を解釈する」、法律用語として「法的目的のために解釈する」の意味が付け加えられた。17世紀初めシェークスピアは「説明する」の意味で用いたが、その語義はすぐに廃れた。

constructはこのラテン語*construēre*の過去分詞形*constructus*から17世紀初期に英語に入った。当初は「具体的に解釈する」の意味であったが17世紀末までには廃義となり、ラテン語*construēre*が本来持っていた「組み立てる」「建てる」の意味が付け加わった。しかし、派生名詞のconstructionには文法用語として「構造・構文」や正式な用法として「解釈」の意味が残っており、to bear a construction（ある解釈ができる）とかto put the best construction on someone's remarks（人の言葉を最大限善意に解釈する）の表現がある。ただし、「解釈」の意味に対応する動詞はconstrueが用いられる。また、形容詞constructiveにも法律用語として「解釈上の」の意味があり、constructive crimeは「準犯罪」を指す。

語源のラテン語*construēre*の語幹*stru-*から生まれた英語にstructure（構造）や接頭辞が添加されたdestroy（破壊する）、instruct（教授する）、obstruct（妨害する）がある。structureは*struere*（建てる）の過去分詞から派生した名詞形*structura*が語源で古フランス語を経て英語に入った。destroyやinstructはラテン語における語形成で、destroyは逆転の接頭辞de-が添加されて、「積み上げたものを元に戻す」から「破壊する」になり、instructは接頭辞in-が添加されて「中に入れて組み立てる」「[情報、知識、腕前を] 身につけさせる」の意味になっている。また、obstructは“toward，against”のob-が添加され「前に積み重ねる」から「封鎖する、閉塞する」の意味が加

わった。

4. fact 「事実」vs. feat「偉業」

この二重語の語源は、ラテン語 *factum*（行為、事件、（偉大な）行為）で、動詞 *facere*（作る、行う）の過去分詞形である。*factum, non fabula*（事実であってつくり話でない）や*dictum factum*（目立つ悪行）という表現からも、*factum*は必ずしも偉業とは限らず、単に事実としての行為を意味することの多い語であった。*facere*は英語の語彙に大いに貢献している。factor（要素、要因）、factory（工場）、 factitious（人為的な） やfactitive（使役の）のように語幹が外見からも明らかな語から、difficult（困難な）［L. *diffacilis* ＜ *dif-*＋*facilis*（＜ *facio*）から］、effect（結果、効果）［L. *efficere* ＜ *ef-* ＋ *-ficere*（＜ *facere*）から］、fashion（流行）［L. *factiōnem* ＜ *facere* から］、*feasible*（実現可能な）［L. *facere*から］、 feature（特徴、特質）［L. *factūram* ＜ *facere*から］、fetish（呪物）［L. *factītium*から］などのように一見してわからない語まで、ラテン語 *facere*から生まれた語は英語に多くある。factorは *facere*の行為者名詞 *factor*がフランス語 *facteur*（要素、要因、郵便配達人）を経て英語に入る。fashionは *factum*から古北部フランス語*fachon* を経て英語に借入される。feasibleは、*facere*から古フランス語*faisable*（実現可能の）を経て英語に入った。

factはラテン語 *factum*より直接借入で16世紀半ばに英語に「気高い行為、偉業」の意味で入る。しかしすぐに、言葉（word）に対する対立概念としての「行為、行動」という意味が加わる。いずれの意味も18世紀から19世紀前半を最後に廃義となっている。16世紀から17世紀にかけては「邪悪な行為、犯罪」が一般的な意味であった。また、このころ「疑惑」に相対する言葉として「有罪」を意味したこともあったが廃義となる。この時代の意味を残している表現として、現在でも法律用語として用いられているafter［before］the fact（犯行後［犯行前］の）がある。17世紀前半に現在の意味である「本当に起こったこと、真実であること」の意味が加わった。これは古典ラテン語にもこのような「出来事」という意味の広がりがあり、後期ラテン語でこの意味を発展させてすべてのロマンス語にその片鱗を残している。フランス語の *fait*（事実、事柄、出来事）、イタリア語の *fatto*（出来事、事実、要点）、

スペイン語の*hecho*（事実、出来事、偉業）などである。

法律用語のmatter of law（法律問題）に対するmatter of fact（事実問題、事実、実際）が16世紀後半に発達した。ちなみに、matter of opinionは「事実ではなく考え方の問題」を意味する。19世紀中ごろには、頭韻を踏んだ表現であるfacts and figures（正確な情報、詳細）や、a fact of life（人生の避けることのできない事実）や親が子どもに教える生殖に関する事実を意味する婉曲的表現であるthe facts of life（性の実態）などの口語表現が生まれた。

補足的に説明したり、前言を強調したり、また要約したりするときに用いられるin factやin point of factは18世紀の初めごろから使われるようになった。 in factと同じ意味で使われる語にin deedがある。「行為において、実践において」の意味から、「実に、現に、実際には」を意味するようになる。OEDの初出はc1340である。deedは古英語由来であり、もともとは「行われたこと、行為」や「勇敢な行為」を意味しており、言葉に対する「一般的な行為」の意味になっていった。そして、16世紀ごろにはindeedと綴られるようになり今に至っている。

法律用語で「法定代理人」はattorneyが用いられるが、これはもともとattorney in factが正式な呼び方で、factは「法律的意味合いを切り離した見方での訴訟の状況や出来事」を意味した。

一方**feat**は、古フランス語*fait, fet*（後に *faict*）を経て、14世紀初めに英語に入った。借入時は「事実、実際」の意味で、the feat of（～の事実）やin feat（実は）の表現があった。しかし、16世紀初めには廃義となっている。15世紀初めには、「偉業、勇気ある行為」の意味が加わり今に至っている。そして、feat of arms（武勲）の表現が生まれた。同じ頃「職業上実践する行為」の意味が加わり、the feat of merchandise（商業行為）やfeats of war（軍務）などの表現が有りえたが、現在では廃義となっている。また、15世紀後半に「悪行、犯罪」の意味が加わったが、やがてfactがその意味を担い、廃義となる。16世紀中ごろに、一般的な意味での「行為、行い」が加わり、フランス語の法律用語*par voie de fait*の翻訳としてby way of feat（暴力によって）が生まれる。しかし、この語義は18世紀前半には廃義となる。

5. inch（インチ）vs. ounce（オンス）

この二重語の語源はラテン語*uncia*（全体の12分の1）で、「全体の12分の1」の遺産相続とか「月12分の1％（年1％）」の利息を意味していた。したがって、*Caesar ex uncia*は「12分の1の遺産相続者カエサル」となる。ラテン語においてはその他に貨幣、重量、長さ、面積の単位としても用いられていた。*uncia*は*ūnus*（one）から派生した語である。union（結合、同盟），onion（たまねぎ），unit（1個、単位）などもこのラテン語からの派生語である。*uncia*がゲルマン語に**ungkja*として入る。英語は、アングロサクソン人が大陸に居住していた頃にローマ人との接触で、*ynće*（*inch*）として借入したが、他のゲルマン系言語にはもはや現存していない。

inchは男性の親指幅に基づく身体尺であり、1 footの「12分の1」を意味しており25.4mmにあたる。イングランド王エドワード2世が、大麦の穂の中央からとった3粒を縦に並べた長さを1インチとしたという言い伝えもあるが、基本的には身体尺であったといわれている。多くの言語で、この単位は「親指」と関係のある語が用いられている。例えば、フランス語では*pouce*（インチ・親指）、イタリア語*pollice*（インチ・親指）、スペイン語*pulgada*（インチ）と*pulgar*（親指）、ポルトガル語*polegada*（インチ）と*polegar*（親指）、ゲルマン系ではスウェーデン語*tum*（インチ）と*tumme*（親指）、オランダ語*duim*（インチ・親指）などである。古代ローマにおいてフィートと関連付けられてその12分の1の長さを1インチとされた。

19世紀には「降雨量測定の単位」としても用いられ、1896年の*Whitaker's Almanack*（ホイッティカー年鑑）にInch of Rainを“a gallon of water spread over a surface of nearly two square feet, or 3630 cubic feet＝100 ton upon an acre”と定義している。比ゆ的に「わずかな、少ない」という意味で14世紀中ごろには用いられ始めた。例えば、within an inch of one's life は「死にかかっている」を意味し、within an inch of（非常に接近して）やinch by inch（少しずつ）が現れた。

一方**ounce**は、後期古英語期に「12分の1ポンド」を意味する重量の単位として、古期フランス語*unce*（F. *once*）を経て英語に入った。古英語で*ynce*（inch）が*yndse*, *ynse*となって「オンス」を意味するようになっていたが、古フランス語の借入により取って代わられた。1オンスは、もともとは

トロイ衡（Troy weight）における12分の1ポンドを指していたが、常用オンス（avoirdupois ounce）での16分の1ポンドで28.349523125gである。通常「オンス」は常用オンスを意味するが、トロイ衡は現在でも貴金属や宝石の計量に用いられている。

inchと同様に、ounceに「わずかな」という意味が生じ、比ゆ的に測ることができない物や諺の表現に用いられる。例えば、An ounce of practice is worth a pound of theory.（理論よりも実行）とか、An ounce of prevention is worth a pound of cure.（わずかな予防はよろずの治療にまさる。転ばぬ先の杖）などがある。

ちなみに、「山猫」の意味のounceは語源が異なる。ラテン語*lynx*が語源で、俗ラテン語**lunciа*を経て古フラン語に*louce*として入る。その語を英語に借入するとき、語頭の“l”が冠詞と誤解されounceとして英語に入る。英語にはラテン語からlynx（山猫）が直接借入され、こちらの方が一般的に使用されるようになっている。

6. lobster（ロブスター）vs. locust（イナゴ、バッタ）

この二重語の語源はラテン語の*locusta*で、“locust”と“lobster”の両方の意味があった。Kleinはこのラテン語は、**lokos-ta*（the jumper）から派生したものであると指摘している。おそらくギリシア語*lekan*（飛ぶ）と関係のある語であるから、もともとは「イナゴ、バッタ」の意味であったであろう。外形の類似から「ロブスター」の意味が付け加わったと考えられる。ただし、OEDは形の類似から「イナゴ、バッタ」の意味が付け加わったと指摘している。このように一つの語が陸上と水中の生物を指し示した例は、beetle（カブトムシ）とcrayfish（ザリガニ）の意味を持っていたギリシア語の*Karabos*とか、lizard（とかげ）とfish（スペイン産鯖）を意味したラテン語の*lacerta*などがあるとChambersは指摘している。

locustよりもlobsterのほうが早い時期に英語には入った。**lobster**は古英語期に*loppestre*、*lopystre*として借入される。-streの添付は古英語の女性行為者接辞の同化であり、また、スペルのcがpに置き換わった理由は定かではないが古英語の*loppe*（蜘蛛）の影響ではないかとBarnhartは指摘している。14世紀ごろにはpがさらに有声音化してbに変化している。しかし、lobster

の語源を古英語*lobbe*であるとする説もある。*lobbe*はインドヨーロッパ祖語の**lubh*-起源で、同系語として中期低地ドイツ語*lobbe*, *lubbe*（thick, hanging lip）や古アイスランド語*lubba*（large cod）があるとChamberは指摘している。

lobsterのOED初出は「ロブスター」の意味でa1000である。17世紀初期に赤ら顔の人に対する侮辱的な名称として用いられるが程なく廃れた。しかし、red as a lobster（真っ赤な〈顔など〉）という表現は残っている。よく似た比喩で、アメリカ英語の俗語として19世紀には頭の回転の悪い臆病で「だまされやすい人」の意味が付け加わっている。また17世紀中ごろにはイギリス兵に対する軽蔑的な名称としてlobsterが用いられた。これは、もともと甲冑を身に着けた円頭派の騎兵に対して用いられたが、やがてそれはイギリス兵に対して使われるようになり、boiled lobsterとも言われた。それに対して警官は青い制服を着ていたことからraw（unboiled）lobsterと呼ばれることがあった。俗語表現としてto boil one's lobsterが18世紀後半に現れているが、これは聖職者が兵士になることを意味した。また、lobster shift とは新聞社で朝の4時に開始する勤務のシフトで、*New York Journal-American*（1937–1966）という午後紙を発行する新聞社で20世紀中ごろに生まれた表現である。その工場がEast Sideの埠頭にあり、そのシフトで働く人が仕事に向かう時間がロブスター採りの人が船で海に出る時間と同じであったことに由来している。

locustは、12世紀か13世紀に古フランス語*locuste*を経て、「イナゴ」の意味で14世紀に英語に入ったと考えられる。16世紀にはイナゴが大量発生して植物を食べつくす習性を比ゆ的に用いて「貪り食う人」とか「破壊的性癖のある人」の意味が生じた。locust yearsは「欠乏と苦難の年、窮乏の歳月」を意味する。17世紀にlocust–bean「イナゴマメやケイキョウの実」の意味が加わる。これはギリシア語の名詞*ἀ̓κρίς*（バッタ、イナゴ類）が、形の類似から、地中海東岸のレバント地方においてcarob-pod（イナゴマメ）に用いられ、またcarob-podとcassia-pod（ケイキョウ）の混同でケイキョウにまで意味が広がったことの影響からlocustにこれらの意味が加わったと考えられる。なお、洗礼者ヨハネが食べていたとするlocustはこれらの実であろうと信じられている。また、OEDで1887初出のlocust clubはアメリカの警官が使うlocust tree（イナゴマメ）の木でできた「棍棒」である。